

追悼

糸魚川淳二先生のご逝去を悼む

延原尊美



1990年9月 ルクルーソーモンソーのエコミュージアムを訪ねて

日本古生物学会名誉会員で、長く評議員（1981–2000年度）を務められた糸魚川淳二先生は2021年11月11日午後5時15分に多治見市の病院にてご逝去されました。享年93歳（満92歳）でした。

先生は1929年（昭和4年）8月21日に岐阜県恵那郡坂下町（現中津川市坂下町）に生まれました。戦中・戦後の混乱期に岐阜県恵那中学校、海軍経理学校予科、第四高等学校を経て、1949年4月京都大学理学部入学、地質学鉱物学教室第3講座の横山次郎先生（故人）に師事した後、京都大学大学院を1957年8月に退学し、名古屋大学理学部教務員として赴任されました。翌1958年2月には名古屋大学理学部助手、1971年5月に助教授、1986年4月に教授に昇進、1993年3月に定年退官されるまで35年余の間、一貫して名古屋大学にて地史学・古生物学の教育・研究に打ち込まれ、名誉教授とられました。また1989年4月から2000年3月まで椋山女学園大学文学部教授としても活躍されました。先生は自然史博物館にも大きく貢献されたことでも知られています。瑞浪市化石博物館（1974年開館）、豊橋市自然史博物館（1988年開館）では設立準備より中心的存在として関わり、設立後は学芸員（嘱託）や顧問として博物館の発展を継続的に牽引されました。また豊橋市自然史博物館では館長（2001～2004年度）も務められています。学界では日本古生物学

会だけでなく日本地質学会、日本第四紀学会、日本貝類学会でも評議員を、名古屋地学会や化石研究会では会長も務められました。多くの学会運営において頼りにされたことは、先生の地に足がついたバランス感覚や先生のお人柄によるものと感じます。

先生は新生代の軟体動物化石を専門分野とされ、とくに中期中新世における熱帯的古環境・古生態の研究で有名ですが、その原点は、京都大学地質学鉱物学教室で師事された横山次郎先生の第3講座にあります。横山先生は綿密なフィールドワークに基づく新第三紀・第四紀の地質・層序の研究や、*Umbonium*属や*Siphonalia*属の系統・進化に関する先駆的な研究、また古生態学を日本で提唱されたことでも知られています。糸魚川先生の卒業研究のフィールドは宮崎層群で、そこから産出した巻貝化石に対して学部4年生の時（1953年）には新種*Siphonalia praedeclivis*を貝類学雑誌に記載されています。そこにはもちろん横山先生の強い影響がありますが、当時の京都大学の動物学教室に貝類学のビッグ2である黒田徳米先生（故人）と波部忠重先生（故人）がおられたことも大きかったと思います。先生は生涯で3新属113新種7新亜種の軟体動物化石を記載しましたが、京都大学での両先生のご指導がそのバックボーンにあります。糸魚川先生のフィールドワーク、進化的・古生態学的な視点、軟体動物の分類学的なセンスは、こうした地質学・古生物学・貝類学の各学界トップの先生方のもとで磨かれたのだと感じます。なお先生が京都大学に在学しておられた時には横山先生の興味はすでに構造地質学の方面に移っておられたようで、当時の地質学教室には軟体動物化石の研究者が不在だったとかがっています。糸魚川先生は横山先生の学問的な血脈を継承しつつも、貝類学についての当時最新の知識や経験もそこに合流させ、先生独自の古生態学を構築されていったように感じます。このような環境で、先生は古瀬戸内中新統における軟体動物化石に関する研究を、京都府奥山田の綴喜層群や岐阜県岩村地域の瑞浪層群でスタートされています。

1957年に名古屋大学に赴任してからは、先生は岐阜県の瑞浪層群をはじめ西南日本に分布する古瀬戸内中新統の層序・古環境・古生態・古地理に関する総合的な研究を推進されました。1961年には「瑞浪層群（中新世）の古生態学的研究」により京都大学から理学博士号を授与されましたが、続く1970年代前半は先生の研究者としてあり方を大きく左右する出来事が相次ぎます。

一つは、1971年秋に始まった中央自動車道の工事がきっかけとなり、瑞浪市からの依頼で先生を中心に化石調査団が結成され、10万点を越える化石標本が収集されたことです。先生は調査団をとりまとめながら、これらの膨大な標本を整理、同定する作業を進めつつ、新設となる瑞浪市化石博物館の展示の設計、博物館研究報告第

1号の執筆と編集もこなされました。瑞浪市化石博物館は1974年5月に開館ですから、化石調査の開始から実質2年7ヶ月で、収集・保存、研究、展示、教育・普及の全てを満たす地域の博物館を市民と共同で作あげたこととなります。先生は後に著書「博物館だより ヨーロッパに原点をもとめて」(共立出版)の中で、瑞浪市化石博物館の開館のことを「この土地に根をおろしたしっかりした基盤の上に、今こそ芽吹いた、新しい生命である」と表現されています。先生は常々「博物館は建物ではなく生きものである」と強調されていました。博物館はしばしば箱物行政の代名詞のように扱われることもありますが、先生の行跡は忘れてはならない地域博物館の原点を後進に示していると改めて思います。

二つ目の出来事は、1974年3月から1年間、在外研究員として、ウェールズ大学スウォンジー校のDerek V. Ager教授(故人)のもとに留学されたことです。出発は瑞浪市化石博物館の展示施工終了の3日後だったのですから、その多忙さは計り知れないものだったと思います。Ager教授は中生代の腕足類化石を専門としており、フィールドワークを主体とする古生態学の代表的なヨーロッパの研究者で、Principles of Paleocologyの著者でもあります。糸魚川先生の古生態学は、ヨーロッパの古生態学を参考に地層や化石産状の観察を基盤としながらも、帰国後にスタートする現生マングローブ沼調査に象徴されるように化石群集に対応する現生生態系の現地調査を組み合わせる展開していきました。先生の古生態学に関する考え方や方法は森下晶先生(故人)との共著「図説 古生態学」(朝倉書店)にまとめられています。この著書にAger教授は序文を寄せられ、日本のユニークな古生態学の立ち位置に賛辞を贈られています。

なお、先生は古生物学者としてだけでなく、博物館研究者というもう一つの顔をお持ちです。その源流は瑞浪市化石博物館を設立した時の実践的な体験をベースに、留学を機に国内外の様々な博物館を訪問し調査をされたところにあります。在外研究員の期間にはイギリス、フランスをはじめ8カ国150館の博物館を巡られました。それは、自然史博物館だけでなく博物館そのもののあり方を問う旅でもあったと思います。

三つ目の出来事は、瑞浪市化石博物館の設立推進と表裏一体をなす形で、先生の生涯の研究テーマの基盤が築かれたことです。岐阜県の中新統瑞浪層群を対象に、綿密な野外地質調査と厳密なサンプリング、化石産状の観察、分類学的データの積み上げに基づく古生態学の王道的研究を進められ、軟体動物化石群集をもとに古環境とその時代変化を復元されました。また同様の古環境変動パターンが、綴喜層群、藤原層群など他の古瀬戸内中新統にも認められることを明らかにし、中新世当時の西南日本の古環境変動のフレームワークを築かれました。先生は1974年に「中新世瀬戸内地域の軟体動物の古生態

学的研究」にて日本古生物学会奨励金(現在の日本古生物学会学術賞)を受賞されましたが、この研究は先生のライフワークともなる中期中新世の熱帯海洋事件の解明や古瀬戸内中新統の古地理の復元につながりました。自然科学の醍醐味は「一つの発見がきっかけとなり、次々と新しい事実が積み重ねられ、確かな推論がなされてゆく」ことだと先生はよくお話をされていました。

このように1970年代前半は先生にとっておそらく最も多忙かつ充実した時代だったと思われませんが、帰国後は古瀬戸内中新統の研究をさらに発展させ、国際的な総合研究に押し上げました。分類学的な偉業としては、1980年代初頭に名古屋大学教養部の柴田博先生(故人)らとともに瑞浪層群産軟体動物化石520種を収録したモノグラフを瑞浪市化石博物館専報第3号として出版したことがあげられます。本書は長らく古瀬戸内中新統の軟体動物化石を研究する者にとってプロ、アマを問わずバイブル的な存在になりました。古環境・古生態学的な仕事としては、大山桂先生(故人)によって富山県の黒瀬谷層からすでに報告されていた*Geloina*や*Telescopium*などのマングローブ沼を特徴づける熱帯系貝類化石を岡山県の備北層群からも1976年に報告したこと、そしてマングローブ植物の花粉化石を山形大学の山野井徹先生らとともに両層から1980年に報告したことがあげられます。1980年は柴田博先生とともに「瀬戸内区の中新世古地理」を瑞浪市化石博物館研究報告で提示した年でもあります。これらにより、日本の中期中新世における熱帯環境の地理的な広がりや具体的には明らかにされてゆきました。中新世の熱帯環境事件に代表されるような新生代の気候変動に関する研究は、微化石や絶対年代のデータの蓄積が進んだ1980年代～1990年代初頭に、IGCP-246などの国際共同研究において盛んに展開されてゆきました。先生は前期中新世末～中期中新世初頭に熱帯環境が北上する汎世界的な古気候事件をトロピカルスパイクと名付けました。この事件に相当する化石動物群としては門ノ沢動物群が知られていましたが、先生はその中に一括されていた前期中新世における西南日本の亜熱帯性動物群を新たに区別し、明世動物群として提唱しました。このように先生は、日本の海洋古生物地理の枠組みを慎重に再検討することも重視されていました。ベースのしっかりした地道な調査に基づいた先生のデータは、グローバルな気候イベントが解明されていく潮流にあってローカルな研究の積み重ねの重要性を再認識させるものであったと思います。

なお先生は、瀬戸内区の中新世古地理については名古屋大学を定年退官される1992年度まで改訂を重ねられていました。また自らが報告したマングローブ沼の古生態をより深く理解するために、東南アジア地域を中心に現生マングローブ沼の調査を山野井徹先生や新潟大学の津田禾粒先生(故人)らと実施されましたが、調査は大学

を定年退官された後も継続され、2012年までに15回10カ国以上に及びました。先生らしい徹底した息の長い研究姿勢を感じます。

一方、博物館と先生との関わりも、在外研究員を終えて帰国してからより深くなり、博物館研究者としての先生が確立されてゆきました。1975年には瑞浪市化石博物館学芸員(嘱託)となり館の運営や企画、化石調査活動により一層牽引的な役割を果たされました。また1988年に開館した豊橋自然史博物館の設立にも関わられ、大学退官後は館長としてもご活躍されました。なお先生にとっては自然史博物館だけでなく、ひろく博物館という存在そのものがその研究対象でした。さまざまなジャンルのミニ博物館の活動も重要視され、ご自身も1984年に瑞浪市日吉町に半原版画館を奥様とともに開設し、石版画や現代美術作品を紹介されました。また先生自ら木版画を製作され、定年でご退官される際の祝賀会では出席者にプレゼントされています。先生は晩年、岐阜新聞社に寄せられた随筆の中で、作品を仕上げることに研究で論文を作り上げることに共通する喜びがあると記されています。糸魚川先生は師匠であった榎山次郎先生が「よい地質図は芸術品である」と仰られていたことを回想されていました。先生にとって自然科学と芸術という行為は表裏一体だったのだと思います。こうした博物館での広い実践と平行して、先生の国内外の博物館巡りは続き、最終的には調査は29カ国に及んでいます。私は末弟として一度だけ先生のヨーロッパでの博物館調査にお供させていただいたことがあります。そのとき実感したことは、博物館調査は野外調査とはまた違った意味で体力・知力・好奇心が必要とされるということでした。1990年代当時、斬新な試みであったエコミュージアムの調査で中央フランスを訪れたのですが、ツーリストインフォメーションでの聞き込みから交通機関のない果てなき田舎道を村の住民に道を訪ねながら歩き(その途中で化石採集もして)、たどりついた博物館では限られた時間の中で展示構成をひとつひとつ取材していかれる……先生はその過程で、その博物館のあり方を土地の自然や風土、文化、歴史とともに現地で実感されながら記録をとられていたように思います。先生の博物館のあり方に関する論考は「博物館だより ヨーロッパに原点をもとめて」(共立出版)や「日本の自然史博物館」(東京大学出版会)などの著書、瑞浪市化石博物館研究報告第35号の論文集などにまとめられています。

さて、先生の晩年のもう一つの顔として、地域の自然保護や環境保全の活動に自然科学者として関わられたことが挙げられます。1990年に発足した「日本シデコブシを守る会」では会長も務められました。シデコブシは東海三県のみ分布するモクレン科の植物で、いわゆる東海丘陵要素あるいは周伊勢湾要素と呼ばれる「生きている化石」です。先生は行政やNGOとの関わりの中で自

然保護運動のあり方・考え方についての記事をいろいろな機会に書き残されていますが、それだけでなく東海丘陵要素の自生地に関する研究成果について3報の論文を2011～2015年にかけて瑞浪市化石博物館の研究報告にまとめておられます。何千万年、何百万年の歴史を持つ自生地の環境をいかに守るか?という問いかけは、持続可能な開発が問われる今日において改めて見直すべき視点だと思います。先生のご専門の地史学・古環境学・古生物学が人間社会のこれからのあり方を考える際に重要な立ち位置にあることを、先生自らが行動で示されたものと強く感じます。

最後に、先生の教育のあり方や人との接し方が、先生の学問や研究の内容以上にその影響を弟子たちや周囲の人たちに与えたことを述べさせていただきます。先生は大学2年時に、榎山先生の研究室の「何か新しいことができそう」で「自由なふん囲気」を感じて、迷わず第3講座を選んだそうです。また榎山先生の英国流個人主義のもと、京都大学の自由な校風もあって大いに学び、おおいに遊んだと回想されていました。その空気は名古屋大学での糸魚川先生の研究室にも受け継がれていたことを弟子の一人として強く実感します。先生は、テーマを与えてから助走期間は助言をなさいましたが、その期間を過ぎると、学生・院生の研究にあれこれと口出しをすることはありませんでした。研究室の先輩が博士課程に進学したときにテーマ対象の分類群を変更したときも励まされ、その道の権威の先生を紹介されていました。ただ決して単なる放任主義ではなく、こちらから質問のために先生のお部屋の扉を叩くとどんなに忙しくとも対応して下さいました。自分も卒業研究の時に先生の部屋に貝化石の入ったもろぶたをたくさん持ち込み、貴重な時間を割いて同定の指導をしていただきました。先生の同定の姿勢は「reasonable」という一言に尽きます。学生としてはその化石の同定が正しいかどうか、お墨付きを先生の口からいただきたいわけですが、同定はあくまでその時点での仮説であり、残されている分類学上の混乱や、cf.やaff.をつける上での判断となる根拠も含めて、学生である自分と対話して下さったことが今でも心に残っております。

訃報をいただいた時は本当に大きな悲しみで、自分たちにとって一つの時代が終わったように思いました。先生は師である榎山先生への追悼文の中で「新しい時代に向かう」努力について述べられています。私達もそのスピリットを継ぎ、次世代とともに新しいことにチャレンジしていきたいと思います。謹んでご冥福をお祈りいたします。

なお本稿作成にあたり、奥様の糸魚川登美子様、瑞浪市化石博物館の柄沢宏明博士、名城大学の齊藤毅博士、名古屋大学の氏原温博士には多くのご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。